

ソウル方言話者の日本語発話における“end focus”

— 自然談話を材料に —

李 惠 蓮

(2001年9月28日受理)

Japanese “End Focus” as Spoken by Native Seoul-dialect Speakers
— With Focus on speech discourse —

Hyeryun Lee

When Seoul-dialect speakers attempt to learn the Japanese language, “end focus” affects syntactic structure, information structure, and speech discourse.

“End focus” is identified by pitch changes and segmental lengthening at the end of the Perceptual Sense Unit(PSU).

Ten Seoul-dialect speakers were chosen for the research on speech discourse.

The results showed that “end focus” is classified as, the grammatical form at the end of postposition in the speech discourse. Mostly “end focus” is identified as meaning of reason postposition 「te(de)」, meaning of adversative conjunction 「keredomo」, meaning of order postposition 「te(de)」, meaning of reason postposition 「node,kara」, and meaning of theme postposition 「wa」.

Also, “end focus” has two discourse functions they are, one, a speech continuance marker, and two, an emphatic marker in the speech discourse.

Key Words: “end focus”, Seoul-dialect speakers, speech discourse, grammatical form, discourse function.

キーワード: “end focus”、ソウル方言話者、自然談話、文法形式、談話的機能

1. 研究の目的

韓国語日本語学習者の発音の問題点として、近年個々の単音の発音よりアクセントやイントネーションなどの韻律的特徴の方が、より重要な問題であることが指摘されてきた(柳1986、関1989、谷口1990、東間・大坪1991、小河原1993)。その韻律的特徴の中でも、今まで特にアクセントに関する研究が多くなされてきた。

一方、イントネーションに関する研究では、文末イントネーションよりも、句末イントネーションの問題点が多く指摘されている(関1989、土岐1990、谷口1990、山田他1993)。

この句末イントネーションについて、李(1999a)では、ソウル方言話者による日本語の発話中の句切りに現れる特徴的イントネーションである“end focus”を、慶尚道方言話者の発話と比較し、“end focus”は

ソウル方言話者の発話に多く現れることを明らかにした。

また、その原因の一つとして母語の影響が考えられ、特に母語のアクセントやイントネーションと密接な関連があることにも言及した。

また李(1999b)では、日本語の発話中に“end focus”が多く現れるソウル方言話者を対象に、“end focus”と文の統語構造や情報構造の関連を明らかにした。

そこで本稿では、李(1999a,b)の結果を踏まえ、ソウル方言話者の自然談話の中で“end focus”がどのような部分に現れるか、その出現箇所や文法形式との関連、またその談話的機能について調べることを目的とする。

2. “end focus”の定義

本研究では、“end focus”を「句、節、文など文法

的、意味的にまとまりのある単位 (PSU-Perceptual Sense Unit) の末尾のイントネーション」と定義する。

その現れ方としては、以下の三つがある。

- ①末尾の音節のピッチが上がってから下がる
「上昇下降調」
- ②末尾の音節のピッチが上がったままの「上昇調」
- ③末尾の音節を長く延ばす「長呼調」

ただし、本研究では句末に現れる“end focus”のみを分析の対象とする¹。

3. 調査の方法

3. 1. 被験者

ソウル方言話者 合計10名 (男性3名、女性7名) である。日本語学習歴6年以上、日本滞在年数2年以上の者であり、全員広島大学大学院の院生である。また、ソウルで言語形成期を過ごした者で、来日以前にはほとんど外住歴はない²。

3. 2. 録音材料

用意したトピックについて、実験者が質問し、被験者に自然に話をしてもらった60分の自然談話である³。

3. 3. 分析の対象

自然談話の中で、句末を分析の対象とする。

3. 4. 録音条件

録音の際には、広島大学の教育学部のスタジオで「SONY カセットコーダー TCM-80」を用いた。

4. 結果及び考察

4. 1. “end focus” の出現箇所

ソウル方言話者10名の自然談話での“end focus”の出現箇所を調べた結果を表1に示す⁴。

表1. “end focus” が出現する句の種類

句の種類	“end focus” 有り	“end focus” 無し	合計
I	283 (42.8)	378 (57.2)	661 (100)
II	2006 (68.6)	918 (31.4)	2924 (100)
III	607 (45.8)	719 (54.2)	1326 (100)
IV	148 (42.3)	202 (57.7)	350 (100)
合計	3053 (58.0)	2207 (42.0)	5260 (100)

(注)

- ・ I : “名詞+助詞φ”、“接続詞”、“副詞”、“動詞”、“形容詞”
- ・ II : “名詞+助詞”、“動詞の活用形”
- ・ III : “S + V (一) + 助詞” “(S) + O + V (一) + 助詞”
- ・ IV : “S + V (二) + 助詞” “(S) + O + V (二) + 助詞”

ソウル方言話者10名の自然談話での“end focus”の出現箇所は、発話全体の句の中で、半分以上の58%の句に現れた。その具体的な“end focus”の出現箇所は「句のI・III・IV」の場合は、発話全体の句の中で40%ぐらいの句末に現れた。しかし、「句のII」の場合は、発話全体の句の中でもっとも多く70%の句末に“end focus”が現れた。

つまり、ソウル方言話者の自然談話の中で“end focus”は“名詞・助詞”、“動詞の活用形”のような短い句に多く現れる傾向があるといえよう。

これについては、谷口 (1990) も韓国語話者の発話は、一つの文中で文節毎にピッチの山が出来、そのため文の流れやまとまりが阻害されると指摘している。このように、一つの文の中で、短い句毎に発話が切れ、その句末に“end focus”が現れることが、ソウル方言話者の日本語発話の不自然さの一つの原因ではないかと考えられる。

4. 2. “end focus” の文法形式および談話的機能

ソウル方言話者10名の自然談話での“end focus”の出現とその文法形式との関係を調べた結果を参考資料1に示す。

まず、“end focus”と文法形式の関連について、“end focus”は句末助詞の中では、接続助詞に一番多く現れ (合計1784箇所)、その中でも理由を表す接続助詞「て(で)」に一番多く見られた。また、逆接の「けれども」、順序の「て(で)」、理由を表す「ので」「から」の順に多く現れた。そして、助詞の中では、助詞「は」が一番多く現れた。続いて名詞単独、複合格助詞の順に、“end focus”が現れた。複合格助詞の場合は、否定表現の「～では(じゃ)なくて」に一番多く現れた。

この結果は井上 (1990) でも、“end focus”と類似の音声的特徴を持っている「尻上がりイントネーション」⁵の場合、「尻上がりイントネーション」と文法形式の関連の中で、「並列表現 (たり、し、て) のあるところ」、「接続表現 (から、それで、でも、つまり)」、「文頭の接続詞 (だけど、けど、やっぱり、で、結局、つまりなど)」、「逆接の表現と仮定でも使われる」と指摘しているものと類似していると思われる。また、この「尻上がりイントネーション」の音声的特徴は語尾を伸ばす言い方が基盤であり、末尾が強調される点は、

在来の日本語で語末があいまいに発話される傾向と違うものであると述べている。

次に、上記の“end focus”が現れた文法形式の中で、もっとも多く現れた項目の具体的な文法的用法と“end focus”の出現の割合を表2から表7に示す⁶。

表2. 接続助詞「て(で)」と“end focus”の有無

	“end focus” 有り	“end focus” 無し	合計
並列	70 (47.3)	78 (52.7)	148 (100)
対比	24 (47.1)	27 (52.9)	51 (100)
同時進行	24 (77.4)	7 (22.6)	31 (100)
順序	207 (84.1)	39 (15.9)	246 (100)
原因・理由	348 (83.9)	67 (16.1)	415 (100)
手段・方法	34 (48.6)	36 (51.4)	70 (100)
合計	707 (73.6)	254 (26.4)	961 (100)

まず、接続助詞「て(で)」の場合、表2に示したように、発話全体の中で74%の所に“end focus”が出現している。また、その文法的用法の中では、原因・理由を表す場合に、“end focus”が一番多く現れた(348箇所、83.9%)。次に、順序を表す場合に“end focus”が多く現れた(207箇所、84.1%)。

この結果から、“end focus”は、文をつなげるマーカーとしての役割と、理由などを表して相手に訴えるような談話的機能も持っていることが伺える。

表3. 接続助詞「けれども」と“end focus”の有無

	“end focus” 有り	“end focus” 無し	合計
逆接	290 (85.5)	49 (14.5)	339 (100)
対比	23 (25.0)	69 (75.0)	92 (100)
提題	28 (31.5)	61 (68.5)	89 (100)
前置き	22 (25.6)	64 (74.4)	86 (100)
挿入	5 (8.2)	56 (91.8)	61 (100)
終助詞的	5 (3.0)	158 (97.0)	163 (100)
合計	373 (44.9)	457 (55.1)	830 (100)

接続助詞「けれども」は、表3に示したように、発話全体の中で50%の所に“end focus”が出現している。また、その文法的用法の中で、逆接の意味を表す場合は、“end focus”が多く現れた(290箇所、85.5%)。しかし、それ以外の用法の場合は、“end focus”はほとんど現れなかった。また、「けれども」が文末に位置する終助詞的用法の場合は“end focus”がほとんど現れなかった。

つまり、“end focus”は文が終わるマーカーよりは、文が続くことを示すマーカーとしての働きを持っていると考えられる。

これに関して井上(1990)でも、「尻上がりイントネーション」は談話の中で、話が続いていること、また相手への働きかけの役割を持っていることを指摘している。

表4. 接続助詞「から」「ので」と“end focus”の有無

		“end focus” 有り	“end focus” 無し	合計
理由	から	153 (84.1)	29 (15.9)	182 (100)
	ので	195 (92.4)	16 (7.6)	211 (100)
理由を表さない	から	0 (0.00)	16 (100)	16 (100)
	ので	2 (10.0)	18 (90.0)	20 (100)
言いさし	から	1 (6.2)	15 (93.8)	16 (100)
	ので	2 (7.4)	25 (92.6)	27 (100)
合計		353 (74.8)	119 (25.2)	472 (100)

接続助詞「から」と「ので」の場合7、表4に示したように、発話全体の中で75%の所に“end focus”が出現している。また、その文法的用法の中で理由を表す場合にほとんど“end focus”が多く現れた(から:153箇所、84.1%/ので:195箇所、92.4%)。しかし、それ以外の用法の場合は、“end focus”はほとんど現れなかった。

この結果から、“end focus”が談話の中で、従属節と主節の間をつなげるような、文が続くマーカーとしての役割と相手に訴える強調の役割も果たしていると思われる。

表5. 助詞「は」と“end focus”の有無

	“end focus” 有り	“end focus” 無し	合計
主題	239 (93.0)	18 (7.0)	257 (100)
取り立て	130 (94.9)	7 (5.1)	137 (100)
旧情報	0 (0.00)	67 (100)	67 (100)
合計	369 (80.0)	92 (20.0)	461 (100)

次に助詞の中で“end focus”が一番多く現れた「は」の場合、表5に示したように、発話全体の中で、80%の所に“end focus”が出現している。また、その文法的用法の中で、談話を始める時の冒頭で主題を表す場合に、“end focus”がもっとも多く現れた(239箇所、93%)。次に強調する取り立てを表す場合にも“end focus”が多く現れた(130箇所、94.9%)。しかし、談話の中で質問に答える場合、何回も繰り返して出た旧情報の場合は、“end focus”は全然現れなかった。

これについて井上(1990)では、「尻上がりイントネーション」の場合、発話の最初の部分で多く現れるが、応答から始まる発話の場合は現れないことを指摘している。

表6. 「名詞」と“end focus”の有無

	“end focus” 有り	“end focus” 無し	合計
名詞	245 (72.5)	93 (27.5)	338 (100)

助詞を伴わない名詞単独の場合、表6に示したように、発話全体の中で73%の所に“end focus”が出現している。その中でも、名詞を一つずつ列挙する場合と質問に答える場合などに“end focus”が多く現れた。

これは日本語の「尻上がりイントネーション」には現れていないもので、ソウル方言話者の“end focus”の性質というのが単純に句末の助詞だけに現れるものではなく、単語単独や助詞に関係なく、句の切れ目に現れる潜在的な句末イントネーションであることを証明するものであると考えられる。

表7. 複合格助詞「では(じゃ)なくて」と“end focus”の有無

	“end focus” 有り	“end focus” 無し	合計
では(じゃ)なくて	95 (89.6)	11 (10.4)	106 (100)

複合格助詞「では(じゃ)なくて」の場合、表7に示したように、発話全体の中で90%の所に“end focus”が出現している。この複合格助詞「では(じゃ)なくて」は前件を否定して、後件に持っていき、つなぎのマーカースとしての働きを強調していると考えられる。

この結果から、“end focus”が自然談話の中で、従属節と主節の間をつなげるような、文が続くマーカースとしての役割と相手に訴える強調の役割も果たしていると思われる。

5. まとめ

以上、ソウル方言話者の日本語の発話における“end focus”について、自然談話を材料に調べた。その結果をまとめると以下のようである。

- ① “end focus”は、ほとんど句末に現れ、その中でも助詞を伴う句に多く現れる。
- ② “end focus”は、句末の助詞の部分に多く現れ、その句末助詞の文法形式により“end focus”の出現の差がある。しかし、助詞を伴わない名詞単独の場合にも“end focus”は現れる。
- ③ “end focus”は文法形式の中で、接続助詞に一番多く現れ、その中でも原因・理由を表す「て(で)」に一番多く現れる。また、逆接の「けれども」、順序の「て(で)」、理由を表す「から」「ので」にも多く現れる。そして、助詞の中では談話の冒頭の主題を表す「は」に一番多く現れる。

以上のことから、

- ④ “end focus”の談話的機能は、発話がまだ続くことを示すような「文が続くマーカースとしての機能」と強調するような「聞き手への働きかけとしての機能」も持っている。

従来、ソウル方言話者の日本語発音の韻律的特徴に関する研究では、不自然な句末イントネーションについての指摘はなされていたものの、どのような文に出現するかといった具体的な調査は行われていなかった。

本研究では、ソウル方言話者の自然談話における“end focus”の出現の箇所やその具体的な文法形式による分類をも試みた。また、その談話的機能についても言及した。この結果は、ソウル方言話者の日本語音声教育に応用できるものであると思われる。そこに、本研究の教育的意義を認めることができよう。

今後は、このようにソウル方言話者の自然談話の中で、相手に積極的に働きかける機能を持っている“end focus”が日本語母語話者に、どのように評価されるかについて調べたい。

(注)

¹ 河野 (1994, pp. 81-82) は“end focus”を次のように定義している。

「文法的、意味的にまとまりのある単位 (PSU-Perceptual Sense Unit) にアクセントを置いて (末尾の音節を長く延ばし Fo を高くして) その単位を明確化する。」

これは、前川 (1990) の無アクセント方言における文の統語構造や情報構造に現れる「句境界音調」と類似のイントネーション現象である。

また、本研究では「句」を、川上 (1957, p. 58) に従い、次のように定義する。

「強調や上昇のイントネーションによるお飾りのつかぬ限り、その音調曲線が一つの山の形をなすような部分である。」

² ソウル方言話者 (10名)

被験者 (性別)	年齢 (歳)	日本語学習歴 (年)	日本の滞在年数 (年)
1(女)	29	6	5
2(男)	29	5	5
3(女)	29	10	6
4(男)	30	12	5
5(女)	24	9	2
6(女)	34	9	2
7(男)	32	11	2
8(女)	25	8	7
9(女)	30	10	5
10(女)	33	20	5
平均	29.5	10	8.8

³ トピックは以下のようなものである。(自己紹介、日本と韓国の文化について)

⁴ ソウル方言話者の発話は句ごとに区切りができ、その句末に“end focus”が現れるため、節や文の末尾には“end focus”がほとんど現れなかった。具体的な例は参考資料2を参照されたい。

⁵ 最近日本の若い女性などによく使われる、継続・中止を示す上がり下がり激しいイントネーションである。

⁶ 各文法形式の中で、“end focus”が多く現れた項目の割合のみを示す。また、「句のI」は省略する。

⁷ 「から」と「ので」の文法的用法の分類は、白川(1995)を参照されたい。

参考文献

- 井上史雄 (1990) 『尻上がり』イントネーションの社会言語学『国語論究 第4集現代語・方言の研究』明治書院 pp. 1-29
- 李惠蓮 (1999 a) 「韓国人日本語学習者の日本語発話の“end focus”における母語の影響—句末を中心に—」『日本語教育』103号 日本語教育学会 pp. 69-78
- 李惠蓮 (1999 b) 「ソウル方言話者の日本語発話の“end focus”の実態—統語構造と情報構造を中心に—」『広島大学教育学部紀要』第2部第48号 広島大学教育学部 pp. 249-256
- 小河原義朗 (1993) 「外国人の日本語の発話に対する日本人の評価」『日本語学科論集』3 東北大学 文学部 pp. 1-12
- 川上 蓁 (1957) 「準アクセントについて」『国語研究』7 pp. 44-60 (『日本語アクセント論集』1995 汲古書院再録 pp. 92-113)
- 河野守夫 (1994) 「話し言葉の認識と生成のメカニズム」文部省重点領域研究『日本語の音声』研究報告集 pp. 1-102
- 白川博之 (1995) 「理由を表さない『から』」仁田義雄編『複文の研究(上)』くろしお出版 pp. 189-219
- 谷口総人 (1990) 「韓国語を母語とする学習者の韻律的特徴について」文部省重点領域研究『日本語音声』研究報告3 pp. 135-137
- 東間由美・大坪一夫 (1991) 「外国人の日本語発話の日本人による評価」文部省重点領域研究『日本語音声』研究報告4 pp. 70-73
- 土岐 哲 (1990) 「中国人・韓国人・アメリカ人による日本語のイントネーションとプロミネンス」『講座日本語と日本語教育』3 日本語の音声・音韻(下)

明治書院 pp .258 - 287

前川喜久雄(1990)「無アクセント方言のイントネーション (試論)」『音声言語』IV 近畿音声言語研究会 pp .87 - 110

関光準 (1989)「韓国語話者の日本語音声における韻律的特徴とその日本語話者による評価」『日本語教育』68号 日本語教育学会 pp .175 - 190

山田泉他 (1993)「外国人留学生に対する日本語音声教育の試み—韓国語学習者を中心に—各地無アクセント方言の韻律的特徴と教育」『日本語音声』研究報告書 pp .285 - 295

柳京子 (1986)「韓国人にみられる日本語の言いあやまり—日本語の超分節要素について」『人文科教育研究』XIII 筑波大学人文科 教育学会 pp .63 - 74

日本語教育学会編 (1987)『縮刷版 日本語教育事典』大修館書店

(指導教官：町博光)

＜参考資料1＞

表1 “end focus” と文法形式

接続助詞				助詞	名詞	複合格助詞	動詞 I	接続助詞	助動詞	副詞	動詞 II	形容詞 I	形容詞 II
理由	並列	逆接	条件										
て/で (348)	て/で (277)	けれども (290)	たら (78)	は (369)	245	では (じゃ) なくて (95)	55	それで (16)	のよ うな (22)	30	18	9	3
ので (195)	とか (92)	ても/ でも (34)	と (49)	が (97)		によ って (8)		だか ら (14)	みた いに (5)				
から (153)	し (79)		ば (22)	の (95)		とし て (4)		です から (3)	のに (4)				
し (47)	と (63)		なら (3)	に (87)		につ いて (4)		しか し (2)	ため に (3)				
	たり (35)			を (83)		に関 して (2)		だけ ど (1)	のよ うに (2)				
	ながら (6)			も (27)		に対 して (4)		でも (1)	そう な (1)				
				から (24)		にお け る (1)		しか も (1)					
				より (4)									
743	565	324	152	786	245	118	55	38	37	30	18	9	3

- (注) a. () 中の数字は“end focus” 有りの数である。
 b. 各セルの下のゴシックの数字は“end focus” 有りの合計である。
 c. 「動詞 I」と「形容詞 I」は修飾表現、「動詞 II」と「形容詞 II」は終止形である。
 d. 文法形式の分類は『縮刷版 日本語教育事典』によるものである。

<参考資料2：自然談話のスク립ト>

①「句のⅠ」：“名詞+助詞 ϕ ”、“接続詞”、“副詞”、“動詞”“形容詞”

例) ひと です から ときどき いない 厳しい

②「句のⅡ」：“名詞+助詞”、“動詞+助詞”

例) かんこくのばあい は かえってみて

③「句のⅢ」：“S+V (一) +助詞”、“(S)+O+V (一) +助詞”

例) ともだちが いて ともだちが sakeをのんで

④「句のⅣ」：“S+V (二) +助詞”、“(S)+O+V (二) +助詞”

例) ほかのひとは しよくどうに いって しよくじを すると しんろうしんぶは
かおを みせて

ふくを セッティング したり ふくを は こん だり

(注) 太字の下線の部分は“end focus”有りの箇所である。